さよなら、私。

大河

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
さよなら、私。

【Ｎコード】
Ｎ０９４５Ｍ

【作者名】
大河

【あらすじ】
私は谷原紗江。
高校１年生。
私には中学時代につらい過去がある。
もうこの世界にいたくない。
そんなことを思っていたけど、
あることがきっかけで余命宣告された同じクラスの一樹から告白される。

そして一樹と一緒にいることになって、
笑えなかったのに、いつのまにか笑っていたり、
段々自分が変わっていく。

あと短い命を私に注いだ彼がすることは…？
そして、今の私を作ってしまった過去…。

…最後に、二人の行く末は…？

第一話「正反対の私と彼」

屋上は好き。
良い風にあたれる。
放課後の夕焼け空のした、私は屋上の端に足をかける。

谷原紗江(たにはらさえ)。
そう名づけられ、
この世界で生きて１６年。

私は初めて死のうと思った。

この世界にいて
なんの意味があるのだろうかと日々思ってたけれど
私、もう駄目みたいだ。

足を一歩前にだそうとした、その時

「紗江～！！ここにいたの？？こんな所で何してるのさぁ～」

振り返ると、友達の真田優紀(さなだゆうき)がいた。
満面の笑顔で私の元へくる。
「屋上なんかでなにしてるのっ？？」
「えっと…空、みてただけだよ」
不思議そうな顔をして、優紀は近づいてくる。
「最近、紗江おかしいよ？…もしかしてさぁ…」
優紀は言葉を濁した。

うーん。そんなに気を遣わなくても。
「優紀、心配しないで。死のうとなんかしてないから」
…作り笑いをしてそっぽを向いた。
「そう…あ、ねぇ。一樹君が呼んでたよ？忘れてたっ！」
てへっ忘れてたっていう顔して照れ顔する優紀。
「わかった。一樹はどこにいるの？」
「えっと…教室で待ってるって！」
「じゃあ行ってくるね」
「はぁいー！」
あああ。疲れる。
人間て、どうして喋るの？
どうして動くの？どうして…いらない感情を持ち合わすの？
そう思いつつも私は自分の教室『１－Ａ』へ向かった。
階段をおりてすぐ、４階に１年生の教室が並んでいる。
その廊下の奥にあるＡ組の教室へ足を向けた。
それと同時に目の前をサッカー部の生徒が行列で走っていった。

Ａ組について、入ったら私の机に座ってる男子がいた。
そいつは、長野一樹（ながのかずき）。
「あ、ちゃんと真田の伝言届いたんだね」
ちょっとそっけない言い方でいってくる。
「あいつはちょっとドジだからさ、届くか心配だったんだ」
軽く笑って、…しらけた。
「で、用は何？」
と、突き刺してみる。
心に刺さったかな。あ、そっちの意味じゃないよ？え？
「あぁ、えっと。…今日言おうか迷ってたんだけどさ」
「うん」

「俺、お前好きなんだよね」

赤くなった一樹の顔は真剣だった。

えっと、長野一樹の紹介がまだだった。
一樹は軽くちゃらけてて、クラスではムードメーカーってやつ。
いつも明るい笑顔振りまいてるけど私としては邪魔くさいにすぎない。

「ふーん。で？」
「付き合お！」
即いわれた。
さっきまで自殺しようとした人になんてこといってんの。
「ごめん。私今日死ぬから。じゃあね」
とか、宣言してみた。…でも今日じゃなくて明日かも。
「ははははっ。そんな冗談つうじねぇよ？？」
馬鹿にされた…。冗談と本音の見分けもつかないやつに。
「私は、生きててつまらないの」
生きててつまるものなんて生きてて一度も得なかった。
あ、一回したか。…でもアレは違う。
「じゃあ俺が楽しくしてあげっからさぁ」
「断る」
「大丈夫！死なないでって！」
「うっさい」
捕まれた手を振りほどくと抱きしめられた。
「いーから。さ。ね？」
「無理っていってんじゃん」
「いやぁ…こんなこといってる紗江だからさぁ。重大事項告白しちゃうけどさ。」

耳元で聞こえる声は震えてる。

間を置いて、一樹は言った。

「俺、余命宣告されてんだ」

場の空気が静まった。

最初から静かだったかもしれないけど、

私の中の時がとまった。

第二話「彼の言葉」

私の中の時が止まった…。

…。

それから少しして私と一樹は帰った。

無言のまま、並んで歩いた。
こんな事があると
陽がおちてきた空はもっと暗くみえる。
下を向いてうつむいていると、一樹が口をひらいた。

「ねぇー。紗江。俺の病気のこととか聞かないの？」

聞いて欲しそうな顔していう。
最初から聞いて欲しいなら自分から言えよ、って冷たくするのがいつもの私だけど
今回ばかりはそうはいかなかい。
そう考える私もどうかしてると、少し前の私は思ってるだろう。
さすがに、今の一樹に今までの私で接していられない。なんとなく。

「なんの病気なの？」

「あててみてくだされー！」

即言われた。
まじなんなのこいつ。すごいはっちゃけた顔で言われたんだけど…。
「…ガン？」
「あったりいいいいい！！」
…単純だなぁ。
「ガン、治せないの？」
「俺の中のガン馬鹿にすんなよー！消しても再生するんだぜ！」
…こいつ、自分の中のガンをまるで最強の我が部下のように褒めてる。
しかも何このテンションの高さ。
私、こういうの嫌なんだよね。
つらいくせして笑顔振り向くやつ。
…あ、それって私もいうのかな。
…ん、私　笑ってないか。
「余命宣告されて、その原因となるガンを褒めるってアンタどんだけお人よしなの」
一瞬顔を曇らせた一樹は言う。
「俺の中のものは俺のものだからな」

今にも崩壊しそうな緩い笑顔をみせ、そっぽを向く。

「ちゃんと治療はしてるの？」

「そんなの当たり前だろー。治療しても意味ないからもう手は加えないのー。」

そしてその短い人生の間を私で暇つぶし？…って言いたい前の自分がでてきそうになった。

「自然消滅すればいいのにね」

余命宣告もされりゃあ自然消滅なんかありえないか。

「そーだよな！この俺のみなぎるパワーとエネルギーと紗江の貴重なめったにない笑顔で！」

ちょ、近所迷惑。薄暗い夜の7時半によく住宅街で叫ぶよ…。しかも恥ずかしいセリフを…。

「ふぁふぁふぁ…」小声で笑ってみた。

そしたら、しらけた。

なんか私馬鹿みたいじゃん。

「なぁー。結局俺と付き合ってくれるわけ？」

…忘れてた。

っていうか…私、一樹好きじゃないし。

「付き合うってさ、両想いじゃなきゃ意味ないじゃん」

「うん、まぁそうだなー。だから付き合おう？」

「いや、私、その、いや…」

ハッキリ言っていいのかね…。

「…いやぁ？いいよ？別に。付き合ってくれないならそれで。」

いいのかい。それじゃあ、付き合わない、を注文しまーす。

「もう、俺と会わないっていう条件つきで！ははは－」

…なにこいつ？

「クラス同じなんだから会っちゃうじゃん」

「だーかーら、紗江は学校きちゃだめなんですー」

「…」

いや、ムリ。まじ。

私、こう見えて中学生からずっと無欠席無遅刻無早退なんで…。

この４年ちょいの記録を…。

「記録を壊したくなければ俺と付き合うといい！全て嫌なら俺、死んだらお前にとり憑くからなー！」

「…。そこまでいうなら、別にいいけど。」

なんかめんどくさいからいいや。

「やったあぁあああああああああぁあああああああ！！！！！！！！」

「いや、近所迷惑だから叫ぶのやめてくれる…？」

満面の笑顔でこっちをみる。

少し赤くなった頬を伝うのは、涙だった。

「ありがと、まじで。」

一樹の軽く茶色がかった髪が揺れた。

「そんなに嬉しいの」

「俺、どんな顔してんのさー！」

一樹は携帯を取り出して、私の肩を抱いてひきよせる。

「ハイ、チーズー！！！」

ピロリーン。

一緒に写メとられた。

まぁもう今更いいけどさぁ。

「うっわーーーー！！照れー！！！／／／／／／／／／／／／／／」

撮った写メをみてしゃがみ込んで照れまくる一樹。
なんか、ここまではっちゃけてると笑いたくなる…。
笑いたくないんだけどさぁ？
「お！！紗江、笑ってる！」
「えっ？」
ピロリーン。
うっわぁ！！
「ちょっと消してよ！！てか、笑ってないってば！！」
必死で携帯をとろうとしたら、画面がみえた。
少し口元が上にあがって緩く笑ってる私がいた。
「…んー。そっか…。」
この一樹の異変をきっかけに私も変わっていくのかもしれない。
私の過去も覆すくらい良いことがあるかもしれない。
笑った証拠を撮った一樹にだけは、心を、許せるかも。
「紗江。」

「うん？」

「俺、死ぬまでの間、俺が紗江を幸せにするから」

顔はみえなかったけど、今までの言葉より心に沁みた。

私も、一樹が死ぬまでの間、一樹を幸せにさせたい。
私を選んでくれた、私を救ってくれたやつだし…。

変わってく自分にちょっと違和感を感じる私だけど、
これもなんかいいのかな。

今の私からみると、少し前の自分がアホにみえる。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0945m/

さよなら、私。

2010年10月9日23時08分発行